

始発期『将棋世界』と作家たち

矢口貢大

1 『将棋世界』の創刊

本稿では始発期¹の雑誌『将棋世界』に着目し、将棋専門誌が同時代の作家たちとどのような関わりを持ったのか検討していく。『将棋世界』は、将棋大成会（のち日本将棋連盟）公認の将棋専門誌として、一九三七〔昭和一二〕年一〇月、博文館より刊行された。本誌は戦中・戦後の一時期の休刊をのぞき、今日まで脈々と続く専門誌であり、近代将棋史を考えるうえできわめて重要な位置にある。そしてこの『将棋世界』には、今日から見ると意外なほど多くの作家たちが執筆陣として名を連ねていた。彼らがどのように『将棋世界』と関わったのかを検討することで、将棋と文学という異ジャンルの特異な接合について考えていきたい。

『将棋世界』の創刊以前の棋界は、様々な棋士団体が離合集

散を繰り返す状況にあった。明治維新による家元制度の崩壊後、明治期の将棋棋士たちは政財界の有力者の後ろ盾のもとで活動していた。明治末期には、棋士の後援者が名士から新聞社へと移行していく。新聞社ごとの系列棋士たちは、関根金次郎の将棋同盟会（のちに将棋同盟社）をはじめ、それぞれの派閥を形成していた。大正期には小派閥が持続しているものの、一九二三〔大正一二〕年の報知新聞主催による東西対抗棋戦など、派閥横断的な棋戦が催されることとなる。これを機に将棋団体統一の機運が高まり、一九二四〔大正一三〕年に東京将棋連盟が発足する。さらに神田辰之助七段の昇段問題による棋界の分裂・再統合（神田事件）を経て、一九三六〔昭和一一〕年には将棋大成会が結成された²。

そして棋界の統一とともに、将棋大成会の機関紙として将棋専門誌の創刊が準備されることとなった。『文藝春秋』の将棋欄では、観戦記者の倉島竹二郎がその準備期のありようを以下のように記述している。

将棋の隆盛にかゝらず、今迄これといふ棋界を代表する雑誌の現れなかつたことは将棋同好者の甚だ遺憾とするところであつたが、今度連盟でその目的に副ふため機関誌を発行することになつた。大いに慶賀すべきことである。これまで将棋雑誌の

振はなかつたのは、それが余りに専門的高踏的になりすぎて大衆が親しめなかつたことや、編輯者の不明から不公平な人間に依頼しすぎて雑誌の使命が失われたことなどに原因してゐる。／＼連盟機関誌は、「将棋」又は「将棋公論」と題名するらしいが、ともかく今迄の将棋雑誌の失敗に鑑み、専門的にも興味的にも大衆にアツピールするやう、そして常に公明正大真に棋界の指針たり得るやう切望してやまない

（倉島生「将棋」³）

ここで倉島は、大成会の機関紙発行に際して、それ以前の各棋士団体の刊行する将棋雑誌が、偏りのある執筆者の人选や専門性の高さによって、その「使命が失われ」「失敗」に終わったと総括している。なお『将棋世界』以前の将棋専門誌の動態に関しては、本論集所収の瀬尾祐一「稽古事」から「興行」へ？——将棋と文学の出会いがない雑誌としての『将棋新報』において詳しく触れられている。そして誌名については、準備段階では「将棋」または「将棋公論」が検討されていたが、結果として「将棋世界」に落ち着くこととなった。倉島は同年六月の将棋欄においても「全国的棋界の統一がなされたのだから、是非これにふさはしい機関誌が必要だ。将棋日本を機関誌にといふ説もあるが、今の

状態では絶対にいけない。一派一党の機関誌ならともかく大同団結後の機関誌たり得るものは、絶対公平にして共存共栄の実をあげ棋の発展に資するものでなければならぬ筈だ」⁴と棋界統一のシンボルとしての将棋雑誌の必要性を繰り返して述べている。

ここで『将棋世界』が、「余りに専門的高踏的になりすぎて大衆が親しめなかつた」それ以前の将棋専門誌の反省から出発している点は重要である。将棋雑誌の読者は、職業棋士の棋譜の鑑賞だけでなく、定跡講座を用いた自身の棋力向上を期待していた。しかし、将棋を指す読者に向けた教材としての難易度の設定には、多くの困難がともなうだろう。講座の難易度を上げればその内容を理解できる読者が減少してしまうが、極端な易化を図れば読者の棋力向上の期待に応えることが難しくなる。瀬尾祐一が述べるように、『将棋世界』以前の将棋専門誌は「教材としての役割を保ちながら、その範囲内においてこの課題の解決を図ろうとした」⁵のであった。

それでは、この課題を認識したうえで出発した『将棋世界』は、どのようにして大衆読者の開拓・獲得を試みたのか。『将棋世界』は定跡講座を充実させる一方で、「読み物」としての側面の強化により、そうした課題の克服を図ろうとしていたと考えられ

る。そして「読み物」としての記事を執筆するために動員されたのが、同時代の作家たちであった。

2 「読み物」路線と作家の登場

一九三七「昭和二二」年一〇月に創刊された『将棋世界』第一巻一号の目次は、以下の通りである。(なお、創刊から戦中期までの『将棋世界』の目次は、「将棋と文学」研究会のホームページ上にて公開されている。⁶⁾)

創刊の辞	宮本生
対局風景	
昇段点前後	
函館日誌	花田長太郎
近代将棋作戦学(一)	土居市太郎
虎視眈々たり関西棋界	木見金治郎
相掛新戦術(一)	花田長太郎
勝負の自信	花田長太郎
経験を語る『難局打開』(一)	木村義雄
近代将棋の本質(横歩取りの防止)	金子金五郎
平手基本定跡(後手の指法)	金子金五郎

私の将棋(一)	神田辰之助
最新角落講義(一)	小泉兼吉
飛車落定跡新講(一)	小泉兼吉
飛香落新講(一)(二七桂の早仕掛)	建部和歌夫
二枚落新講(一)(銀多伝)	建部和歌夫
詰将棋の考へ方と新題二種	塚田正夫
新作懸賞詰将棋	塚田正夫
左香車落決戦譜	梶一郎・樋口義雄
観戦記	棋好子
将棋旅日記(山形・新潟・博多)	梶一郎
古名局より『中盤の研究』	樋口義雄
私が八段になるまで	神田辰之助
棋聖宗歩	三宅青夢
将棋人お国調べ	宮本弓彦
ひいきを語る	将棋愛好諸士
将棋界案内	編集局
他山の石	
歴代名人表	
達人を描く	
棋界ナンセンス	
編輯後記	宮本生

『将棋世界』創刊号は、高段の棋士たちが執筆を担当し、平手や駒落ちの講座を中心とした連載記事が目立つ。また「虎視眈々たり関西棋界」などの記事では、関西棋界への目配りがなされており、棋界の東西対立の解消の意図が伺える。さらに「神田事件」の当事者であった神田辰之助が「私が八段になるまで」において、棋界を二分するに至った自身の昇段問題に触れており、「将棋大成会公認」の誌面においてそれが活字化されたこととの意義は大きい。まさしく棋界の「大同団結」を全面的に打ち出した紙面構成になっていることがわかる。

しかしこのように見ると、『将棋世界』が、創刊号においては講座を中心とした紙面になっており、大衆読者の獲得という狙いからはややずれた印象を覚える。それについて『将棋世界』の編集にあたった宮本弓彦は、この号の「編輯後記」⁷において、次号以降の執筆陣の変更とともに「雑誌の本質上、柔らかな味のある読み物が絶対不可欠であります」と述べ、「此の方面に対しても、次号よりさらに用意がある」ことを読者に対して予告している。ここには当初企図していた大衆向けの「読み物」記事が揃わず、次号以降でそうした側面を拡充しているという戦略を読み取ることができる。

さて翌月の『将棋世界』一二月号においては、その予告通り「読み物」記事の充実が図られることとなる。この号

の巻頭には、文壇の大御所であり愛棋家でもあった菊池寛の「将棋哲学」が顔写真付きで掲載されている。

将棋はとにかく愉快である。盤面の上で、この人生とは違った別な生活と事業がやれるからである。一手一手が新しい創造である。／冒険をやつて見ようか、健康にやつて見ようかと、いろいろ自分の思ひ通りにやれる。その上遊戯とは思はれぬ位ムキになれる。

（菊池寛「将棋哲学」）

「将棋哲学」といういかめしい題を冠しているが、その筆致は右の如くきわめて平易であり、通俗哲学あるいは処世哲学といった趣きが強い。むしろそうした平俗さに徹することこそが菊池に求められていた役割であり、大衆読者の獲得という始発期『将棋世界』の指針を反映したものであったと考えられる。菊池はその後も「続将棋哲学」（一九三七「昭和一二」年二月）、「続々将棋哲学」（一九三八「昭和二三」年一月）、「将棋哲学」（同二月）と『将棋世界』巻頭にこのシリーズを連載していた。なお、菊池寛の将棋関連記事については、西井弥生子の調査がある¹⁰。

またこの号には、伝奇小説や探偵小説で知られる角田喜久雄の「個性ある棋士」という記事が掲載されている。この記事で

紹介されている「棋士」とは、職業棋士ではなく将棋を指す作家たちのことである。特に将棋を愛好していた大衆文藝作家たちの様子が、その棋風とともに紹介されている。

文壇にこの将棋が大流行してゐるといふと知人の中にも仲々猛者が居る。伝へ聞くところによると、水谷準氏はねばり勝ち(形勢が怪しくなると考へこんでしまつて相手が欠伸をして戦意を失ふまで腕をこまねいてゐる。所謂忍耐力による奇勝)を得意とし、挿画の松野一夫氏は相手の好意に乗じて大崎八段に一勝せる十数年前の記録を声高に披瀝して戦前敵を圧迫するの一手を常に用ふるし、大下宇陀児氏の敗因は不思議と必ず前夜の徹夜による寝不足にあるそうだし、木々高太郎海野十三両氏は専ら一列に二歩三步を並べる奇手を得意とするさうだし、江戸川乱歩吉川英治両氏の対局にあつては互いに批評しあひ以て自己の実力を称揚されるさうであるし、等々、之を要するに二人を除いて我が好敵手として推奨するに足る個性ある棋客と考へてゐる。

(角田喜久雄「個性ある棋士」)

角田の記事は、大衆文藝周辺の作家たちを「棋士」に置き換え、それらの人物たちの将棋を「強さ」とは異なる「個性」

という軸のもとで配置した点において、きわめて興味深いものとなっている。職業棋士たちの将棋は、「強さ」によって厳密に序列化されている¹²。一方で角田の記事で紹介されている。作家たちの将棋は、嫌がらせのような盤外戦術や反則行為(角田の述べるところの「奇手」)を通して、ユニークに描き出されている。彼らの将棋は序列化されることなく固有名とともに列記される。それぞれの作風や棋力とは異なる軸で作家を描出する営みは、有名作家たちの個性をその固有名とともに消費する読者の期待に応えた「固有名消費」(大澤聡)¹³の一環として位置づけることができるだろう。一九二〇年代の雑誌『文藝春秋』を中心とする「文壇将棋」のコンテンツ化は、作家の棋譜が素人将棋にもかかわらず商品価値を持つことを示していた。もともとそれまでの作家たちの将棋は、番付(図)新版文壇将棋天狗番付¹⁴)といふかたちで「強さ」による序列化の意図をはらんでいるものであり、その意味であくまでも職業棋士の模倣に過ぎないものであった。角田がここで注目した文壇棋士の「個性」という布置による文壇の見取り図は、職業棋士と職業文士が雑居する『将棋世界』の紙面上におけるそれぞれの役割分担の形態として、きわめて重要なものであったと考えられる。

さて、このように『将棋世界』第二号は、流行作家を動員す

新版文壇将棋天狗番付

白眉は露伴と菊池の優劣



図「新版文壇将棋天狗番付」

ることで記事の「読み物」としての役割を強調し、大衆読者の獲得を明確に図るものであった。この号の「編輯後記」では、以下のようにその成果を誇っている。

個人的な御指導を願ふこと容易ならざる高段諸大家が、責任講座を以て、本誌フアンの手をとつての、親切な御指導をあたへ

らるは、本誌の最も誇りとするところであります。而かも本号に於ける読物陣の強化は、菊池寛先生、倉島竹二郎先生及び角田喜久雄先生の諸大家よりいづれも珍とするに足る珠玉の文字をいたゞきましたから、必ず読者のご満足を得る事と御確信致します。

(宮本生「編輯後記」)

ここに『将棋世界』の紙面構成のねらいが明確に表れている。まず高段の棋士たちによる定跡講座を充実させることにより、読者の棋力向上の期待に応える。職業棋士による有力者向けの個人指導が、雑誌読者に向けて広く開かれた意義がここで強調されている。一方で、自身は将棋を指さない読者や定跡講座にさほど興味を持たない読者に向けては、流行作家による「読み物」を通して雑誌の購買意欲に働きかけている。のちの「編輯後記」においても「一流棋士による名講義を右翼に、名家読物を左翼に、無敵の陣容」¹⁵と称されるように、職業棋士と作家が両輪となって『将棋世界』の誌面を構成するという販売戦略は、その後も継続していくこととなる。

さらに「読み物」陣の強化としては、一九三八「昭和二三」年一二月号において幸田露伴の「象棋余談」が掲載されている。愛棋家としても著名であった露伴は、遊戯としての将棋に対す

る博物学的な研究にも力を注いでいた。『将棋世界』に掲載された「象棋余談」は、「将棋雑考」（一九〇〇〔明治三三〕年）、「将棋雑話」（一九〇一〔明治三四〕年）以来の将棋史研究の成果であった。こうして菊池寛・幸田露伴という文壇将棋の両雄が『将棋世界』誌面に並ぶこととなった。

また『将棋世界』誌上の忘れてはならないコンテンツとして、指し将棋の終盤を模したパズルである詰将棋があった。創刊号より「懸賞詰将棋」として誌面上で詰将棋が出题されており、読者参加型のコンテンツとして機能していた。『将棋世界』に掲載された小説家の随筆には、この詰将棋をめぐるものが多い。『将棋世界』一九四一〔昭和一六〕年六月号に掲載された藤沢桓夫の「将棋随筆」においては、詰将棋の魅力が以下のように語られている。

退屈した時や、仕事に疲れた時や、眠る前に、僕は詰将棋を解いてみる。すると大抵気分がよくなる。詰将棋には必ず詰む筋道が仕組まれてあるのであり、しかも、それに人間の頭が考へ出した筋道なのだ。人間の頭が考へ出した筋道である以上、どんな複雑なものであれ、それは人間の頭で必ず解ける筈である。この「困難」への闘志をそそり立てるところにどうやら詰将棋の魅力はあるやうだ。それだけに、詰将棋の解けた時の気持ちは、

それがむづかしいものであればあるほど何んとも言へず快い。

（藤沢桓夫「将棋随筆」¹⁶）

ここで藤沢は詰将棋を解く快樂¹⁷の言語化を試みている。むろん職業棋士であれば、詰将棋が「むづかしい」とは、なかなか口には出しにくいだろう。続けて藤沢は、詰将棋の出题ミスに言及しており、そこで「どうしても解けないで憂鬱になったのが、後で問題が間違つてゐたのだと判つた時の腹立たしさ」を表明している。同様に詰将棋の出题ミスについては、『将棋世界』誌上で、佐々木茂索が「余詰早詰があると癪に障る。出題者がよくく吟味するのは勿論の事、校正も絶対的入念に願ひたい。名人、八段、七段、大抵の人の出題にちよいく間違ひがある」¹⁸と注文をつけている。

ここで注目すべきは、そうした詰将棋への思いを語る作家の位置である。作家たちは、読者とともに「むづかしい」と唸りながら詰将棋の解答を試みる。そして読者たちが感じていた詰将棋の快樂を、彼らが共感できるかたちで解きほぐして言語化する。さらに出題ミスに対しては、読者とともに憤慨してみせる。ここで作家たちが立っているのは、職業棋士ほど棋力の高くない読者に寄り添い、彼らを代弁する立場である。換言するならば、職業棋士と読者の中間に位置しつつ、両者を接続する

存在としての作家の役割を看取することができる。そして、このような存在としての作家もまた『将棋世界』の大衆読者への働きかけの一つの役割であったと考えられる。

3 観戦記者としての作家

これまで見てきたように、始発期『将棋世界』に記事を寄せた小説家たちは、「読み物」陣として大衆読者の興味関心に働きかける存在として機能していた。また詰将棋の魅力を語る作家たちは、職業棋士ほどの棋力が無い読者たちに寄り添う立場から執筆を行っていた。一方で、もう一つの作家に期待された役割として、棋戦の観戦記の執筆があげられる。当初観戦記は、各新聞の将棋欄の記者が担当していた。なかでもその草分けとして『読売新聞』の菅谷北斗星や『毎日新聞』の倉島竹二郎が知られている。特に倉島はもと『三田文学』出身の小説家であり、一九三二「昭和七」年に『国民新聞』に観戦記を執筆したのを契機に観戦記者へと転身した¹⁹。観戦記者は高い棋力を有しており、職業棋士の難解な将棋のねらいを、読者に対して解説する役割が求められた。コンテンツとして自立した観戦記は、「観戦記、文学の龍虎たる菅谷北斗星と倉島竹二郎」²⁰と称されるように、ほとんど文学作品に類する質のものとして語ら

れるにいたる。

また『将棋世界』誌上においては、棋士の対局に立ち会った作家による観戦記が寄せられた。一九四〇「昭和一五」年七月号には、菊池寛による花田長太郎と木村義雄の対局の観戦記が掲載されている。これは、一九三六「昭和一一」年八月五日の第一期名人決定戦第十八局の観戦記で、もとは『東京日日新聞』（同年八月一六日）に発表されたものである。

花田君の一六歩、木村君の七四歩で、波乱の起りさうだった局面も純然たる相懸りの同形となった。「……」木村君はいふ。『七四歩で同形となるが、自分のほうから決めるのがイヤであつた』／感想は簡単だが消費時間を見ても分るやうに、この辺は単なる変化ばかりでなく、すべての味や含みを考へ、また敵の作戦に陥るまい、何とかして敵の作戦を観破して自己の行動を有利に導かうと、処々実々全智の火花を散らして戦つてゐるので、われ／＼の相懸り戦とはまさに天と地の相違だ。／この形は今まで無数に出来た形である。大分古い話だが、文藝春秋誌上で素人将棋をやつたとき、梅原龍三郎君と故南部修太郎君が殆どノータイムでこれと全然同じ局面をつくつた。萩原君がそれを「ともかくも相懸りが出来あがつた」と評してゐたが、本局には「ともかく」などという失礼な言葉は許されない。天

才花田、木村両君が苦心を重ねしかもかく連はざるを得なかつた絶対抜き差しならない駒組である。

〔菊池寛「待望の一戦（第十八局）」²¹〕

まず、この菊池寛の観戦記において特徴的なのは、作家としての中間者の位置取りにある。感想戦における「七四歩で同形となるが、自分のほうから決めるのがイヤであつた」という木村義雄の「簡単」な感想を聞いた菊池は、その断片的な発話から木村の対局心理を丁寧に解説する。先ほど見たように作家は詰将棋に際しては読者の立場を代弁していたが、ここでは読者に向けて棋士の心理を代弁してみせる。将棋専門誌における作家とは、このように職業棋士と読者との間に位置をとりつつ、誌面の需要に合わせてその距離を調整しながら、それぞれの立場を言語化するという中間者の存在なのであつた。

またここで菊池が「大分古い話」として、『文藝春秋』誌上での「素人将棋」の棋譜を参照している点は重要である。菊池はそれを梅原龍三郎と南部修太郎の対局としているが、これは記憶違いであり、一九二八「昭和三年三月の『文藝春秋』」に掲載された久米正雄と梅原龍三郎の対局であつたと考えられる。戦型はいずれも相掛かりであり、一部に異同があるものの、花田―木村戦とほぼ一致する局面があらわれている。萩原淳の

講評においても「手順に前後はあれど相懸戦として先手後手の対陣は堂々と整備された」²²と述べられており、菊池がここで回顧する「ともかくも相懸りが出来あがつた」という評言と近似している。八年前の素人将棋の棋譜を、観戦記においてほぼ正確に参照する菊池の記憶力は驚くべきものである。そしてこのように過去の棋戦のアーカイヴから棋譜を参照する記憶の働きは、職業棋士たちの棋譜の轍を踏襲する「定跡」という営みに近接していくことになるだろう。素人将棋の対局とはいえ、その棋譜は公開されたものであり、文士の対局は職業棋士の棋譜と同様に、「定跡」のように読者がアクセス可能な記憶のアーカイヴとして機能していたのだ。

しかしながら菊池の観戦記においては、花田―木村戦における局面が、ノータイムで指された素人将棋の局面と類似するほど、かえって「われ／＼の相懸り戦とはまさに天と地の相違」が浮き彫りになるという逆説が述べられている。菊池によつて「天才」と称される花田と木村が、苦心の末に組み上げた「絶対抜き差しならない駒組」は、素人将棋の同様の局面と決定的に異なる。表面上は素人将棋と同様の局面をなぞっていたとしても、職業棋士の将棋は「単なる変化ばかりでなく、すべての味や含み」が水面下で計算されているのであり、菊池の観戦記はそのような不可視化された思考の痕跡を読み取ることに力点

を置くのである。職業棋士―読者の仲介者としての作家の機能はこのような形で發揮されているのだ。

また作家の手になる特異な観戦記として、『将棋世界』一九四〇「昭和一五」年五月号に掲載された南部修太郎「新古将棋の争ひ」²³にも触れておきたい。これは金易二郎と花田長太郎の対局の観戦記であり、「金八段の面貌は決意の色動いて、応じたり八四歩！息を凝らすこと数刻、僕の二六歩の予想は外れて花田八段は意外にも五六飛！」といった調子で、時代小説の鏝迫り合いと見紛うような筆致を通して、緊迫感ある対局場面が描写されている。対局の合間に棋士が長考に入ると「僕」の饒舌がその余白を埋め、対局時間の推移と観戦期を読む読者の時間があたかも同期されるかのような仕掛けが施されている。興味深いのは、そうした饒舌体を通して語られる観戦記者の心理である。

ちつと笑ひ話になるのだが僕がこの観戦記を書きはじめてからいろいろと反響を得た中に、京都に住む僕の好敵手の一友書信を寄せて曰く、『如何にも強さうな顔付で書いてゐるのが誠に片腹痛い』と。僕思わず苦笑を浮かべたが、たとへ如何に僕が心細い棋力の持ち主であるとはいへ、准名人の八段諸氏をおそれて平つくばつた日には、自由な観戦記などかけるものではな

い。で、聞えると定めし八段諸氏の立腹をかうだらうから小さな声でいふが、観戦記一年生の僕実は『八段何者ぞ?』と豪さうに腹を構えて筆を執つてゐる訳。読者よ、諒して以て僕の棋力のほどは笑い給ひぬかし!

(南部修太郎「新古将棋の争ひ」)

ここでことさら露悪的な形で表白されているのは、棋界のアウトサイダーとしての小説家の立場である。将棋界の高位にある棋士の対局に立ち会う「僕」は、「心細い棋力」の持ち主に過ぎない。しかし、観戦記を執筆するにあたっては「八段何者ぞ?」という気概を腹に蔵している。そうした不釣り合いは滑稽ではあるものの、「強さ」と段位という将棋界の序列化の機構から、あくまでも「自由」なアウトサイダーとしての作家の立場が浮かび上がってくる。職業棋士の棋戦に立ち会う作家という存在の奇妙さと滑稽さ――南部の観戦記が対象化するのはそのような自身の立場そのものであり、自覚的にそれを笑い飛ばし、「自由」を謳歌するような特異な観戦記文体の模索がなされていたのである。

4 むすびに——将棋と文学のあいだで

本稿では始発期『将棋世界』に掲載された作家たちの役割を検討することで、文藝誌とは異なる将棋雑誌における作家固有の機能を分析してきた。それは①「読み物」陣としての大衆読者の獲得、②棋士―読者間の中間的位置づけとしてのそれぞれの立場の代弁、③アウトサイダーとしての棋界批評と自己対象化としてまとめることができる。

本稿で検討した始発期『将棋世界』における大衆読者の獲得が、実態として成功していたのか否かについて、残念ながら手元の資料では判断しがたい。しかし講座と「読み物」の両翼で読者の期待をカヴァーするという戦略が、多くの困難をともなうものであったことは想像に難くない。『将棋世界』一九四二「昭和一六」年八月号の「編輯後記」からは、そうした困難の一端が伺える。

△講義物が少いとお叱りが大分あったが、今月は二枚落、飛車落、平手大系を始め、断片的には終盤二台、稽古帖等、可成りの頁を割いたつもりである。△読者の投書には毎度ながら有難く拝見してゐる。但し、内容に就いて「読み物を多くせよ」、「研究物を多くせよ」と両端の注文があるには困つて了ふ。両

方とも本誌の熱心な読者である。

(永澤「編輯後記」²⁴)

ここで述べられているように、定跡講座を求める読者と娯乐的な「読み物」記事を求める読者との間での分断は解消されなかった。一つの雑誌でそれらの期待に応えることは、難しくかつたのではないかと考えられる。いずれも「熱心な読者」であるだけに、編集部への対応も困難であった。また一九四〇年代に入ると戦局の悪化に伴い、かつて充実を誇っていた『将棋世界』の誌面は縮小されはじめた。本誌に原稿を寄せる作家も減少し、講座と「読み物」の両輪体制はかつてのように維持できなくなっていく。戦時下における娯楽は肩身が狭いものとなり、一九四二「昭和一七」年以降はそれまで棋界の大口のスポンサーであった新聞棋戦の縮小が検討されはじめた。また『将棋世界』の誌面においても、木村義雄「将棋と戦陣訓」(一九四二「昭和一六」年三月)など、時局に迎合する戦時色の強い記事が数を増していった。

最後に触れておきたいのは、そのような状況で『将棋世界』一九四二「昭和一六」年二月号に掲載された、文藝評論家・新居格の「将棋四方山話」²⁵である。これは、将棋と文学とのあいだを、アナロジーを通してふたたび架橋しようと試みた示唆

的な論考である。そこで新居は、かつて雑誌『新青年』で企画された井伏鱒二との対局の様子を回顧している。「ヨイシヨ、ソラ来た」という掛け声で、早指しで行われた対局は、あまりの早さから棋譜がとれないほどのものであった。新居はそれに對し「めちやくちや将棋に棋譜のありようがない」と述べている。文壇将棋の棋譜を記録しコンテンツとして商品化するという当時の風潮に対して、どこか冷めた眼差しがそこにはある。さらに続けて新居は「文壇の人々にも将棋の好きな人が沢山ある。それらの将棋逸話と来たら数限りもない」が、「それは可笑しい文の話で、本誌の如き専門雑誌にかくべき筋合いではないと思ふから止めた」とする。これまで「読み物」として求められていたはずの作家の将棋にまつわる「個人的」なエピソードの列挙は、早々に断念される。そして代わりに新居が描くのは、自身と木村義雄をめぐる以下のような関係性であった。

たゞ、わたしは誰からともなく木村名人は対局中、時々庭へ下りて四股を踏む、すると、天外の妙想奇手が浮んで来るのだと聞いてゐた。「……」／「ようし、原稿をかくのに詰まつたら、庭に下りて自分も四股を踏まう。たしかにいゝ方法だ。第一原稿用紙は線を引いてあること、将棋盤に似てゐる。一字一字が非常な熟慮の下に入れられて行つていゝのだ。それなのに、わ

たしは井伏君と将棋を指すときにやうに、文字を抛り込んで来た。どうも嘘らしいが、木村名人の四股の話は真偽如何に拘らず、わたしにはよき示唆だった。そんなことから、木村義雄氏はいつもわたしの机の上にあるのである。

(新居格「将棋四方山話」)

新居の随想において、名人であった木村義雄と自身の執筆活動が、将棋盤―原稿用紙のマス目に向き合う行為のアナロジーを通して接合される。木村義雄の噂話の真偽は、ここでは問題にならない。むしろそうした逸話が虚構であるほど、将棋を指すイメージは純化され、文学という虚構をめぐる営為と近接していくことになるだろう。ここでは想像力の次元において、将棋と文学の関係は対称的かつ不可分のものとして描出されているのである。

これまで見てきたように始発期の『将棋世界』においては、作家たちが執筆陣に名を連ね、将棋専門誌としての雑誌の性格を踏まえつつ、多様な表現が模索されていた。それらは作家が実際に将棋を指し、あるいは自身と将棋との関係性を〈書く〉という実践を通じて、将棋と文学との関係性を見定めていく営為であったと一旦は結論することができよう。もともと棋界と作家の間わりは、『将棋世界』の戦後における再出発から、

今日に至るまでなお続いている。それらの文化史的分析を今後の研究課題としたうえで、ひとまずこの稿を閉じたい。

- 1 大期喬也・清水孝晏・野口益雄「将棋世界五〇周年記念座談会 将棋世界五〇年とのつきあいを語る」(『将棋世界』、一九八六〔昭和六二年一〇月〕において、『将棋世界』が「昭和十年代が黎明期、二十年代から三十年代が苦難期、四十年代が急成長期、五十年代が安定期」であったという見取り図が示されている。本稿で用いる「始発期」は、『将棋世界』創刊から休刊までの一九三七〔昭和一二〕年から一九四四〔昭和一九〕年までを指す。
- 2 以上の記述は、増川宏二『将棋の歴史』(二〇一三〔平成二五〕年二月、平凡社)を参照した。
- 3 倉島生「将棋」、『文藝春秋』、一九三六〔昭和一二〕年三月。
- 4 倉島生「将棋」、『文藝春秋』、一九三六〔昭和一二〕年六月。
- 5 瀬尾祐一「稽古事」から「興行」へ?——将棋と文学の出会い
ない雑誌としての『将棋新報』、本論集所収。
- 6 「将棋と文学研究のための基本データ」
<http://www3.u-toyama.ac.jp/kotani/shogi/databseindex.html>
- 7 宮本生「編輯後記」、『将棋世界』、一九三七〔昭和一二〕年一〇月。
- 8 菊池寛の愛棋家としての側面については、春原千秋『将棋を愛した文豪たち』(一九九四〔平成六〕年三月、メディアカル・カルチュア)にて詳しく触れられている。
- 9 菊池寛「将棋哲学」、『将棋世界』、一九三七〔昭和一二〕年一月。
- 10 註6に同じ。
- 11 角田喜久雄「個性ある棋士」、『将棋世界』、一九三七〔昭和一二〕年一月。
- 12 もっとも将棋における「強さ」を客観化ならびに具体化して考えることには留保が必要である。将棋における「強さ」の指定しがたさについては、久保明教『機械力ニバリズム』(二〇一八〔平成三〇〕年九月、講談社)における分析が示唆に富む。
- 13 大澤聡「批評メディア論 戦前期日本の論壇と文壇」(二〇一五〔平成二七〕年一月、岩波書店)。
- 14 「新版文壇将棋天狗番付」、『読売新聞』、一九三五〔昭和一〇〕年八月二七日朝刊。
- 15 宮本生「編輯後記」、『将棋世界』、一九三七〔昭和一二〕年一月。
- 16 藤沢桓夫「将棋随筆」、『将棋世界』、一九四一〔昭和一六〕年六月。
- 17 藤澤とは異なる立場の作家の詰将棋論としては、甲賀三郎「比類なき頭の遊戯」(『将棋世界』、一九三九〔昭和一四〕年四月)が挙げられる。そこで甲賀は「詰将棋のいゝ所で且つ特徴とするの所は、その合理性にある」とし「盤上の駒は一つとして無駄がなく、手駒に無駄がないのみか、盤上で取つた駒まで無駄があつてはならぬ。全く数学でいふ必要にして十分な駒ばかりで成り立つて、而も俗詰みはない」と述べている。探偵小説作家として知られる甲賀が、「合理性」を詰将棋の美点として指摘している点は興味深い。
- 18 佐々木茂索「詰将棋合評会 癩に障る」、『将棋世界』、一九三九〔昭和一四〕年四月。
- 19 春原千秋『将棋を愛した文豪たち』、一九九四〔平成六〕年三月、メディアカル・カルチュア。
- 20 倉島竹二郎「菅台北斗星「木村土居七番勝負の予想」、『将棋世界』、一九四〇〔昭和一五〕年三月。

- 21 菊池寛「待望の一戦（第十八局）」、『将棋世界』、一九四〇〔昭和
一五〕年七月。
- 22 久米正雄・梅原龍三郎「本誌主催 素人将棋」、『文藝春秋』、
一九二八〔昭和三〕年三月。
- 23 南部修太郎「新古将棋の争ひ」、『将棋世界』、一九四〇〔昭和
一五〕年五月。
- 24 永澤「編輯後記」、『将棋世界』、一九四二〔昭和一六〕年八月。
- 25 新居格「将棋四方山話」、『将棋世界』、一九四二〔昭和一六〕年二月。

付記

本稿の引用に際して旧字を新字にあらため、ルビを適宜省略した。また本稿の執筆に際して、『将棋世界』編集長の田名後健吾氏より貴重な資料をご提供いただいた。記して感謝を申し上げます。

〔東京大学大学院総合文化研究科博士課程〕